

近畿大学理工学部 正会員○北川博巳

近畿大学大学院 学生員 岡本英晃

近畿大学理工学部 正会員 三星昭宏

1.はじめに

高齢化が今後一層進展してゆくわが国では、高齢者が活発に外出できる環境を整備してゆき、社会活性を維持してゆくことが課題となる。しかしながら、高齢者は加齢と共に体力が低下してゆき、身体的なことが理由で外出を控える場合もある。今後高齢者の外出活性を高める上では、公共交通であるバス・鉄道等のアメニティを高めてゆき、移動性を増加させてゆくことは課題である。とくに、公共の場としてのターミナルにおける休憩行動も併せて考慮してゆく必要がある。とくに、多くの人が集中する駅ターミナルのニーズは変化している。来たるべき超高齢社会の到来に備え、公共スペースとしての駅施設における、ユニバーサルデザインの指針を今後確立してゆかねばならない。高齢者が駅施設を快適に利用できるような整備を進めてゆくためにも、移動を補助する施設として位置づけられるであろう、休憩施設に関する研究は必要である。本研究は、その手始めとして、高齢者の駅ターミナルにおける休憩行動の調査を実施し、駅構内のベンチや休憩場所の利用状況や行動特性について把握する。そして、今後の高齢者を考慮した施設づくりについて考察することが目的である。

2.調査の方法

本研究では、高齢者の駅ベンチの使用状況を把握するため、平成9年12月にJR大阪・天王寺・京都の各駅ターミナルに設置されているベンチ、あるいは休憩目的で使用されるような、着席可能な箇所を調査員が状況を観察することにより、利用者の休憩行動について把握した。調査項目としては、利用者の年代、利用時間、駅構内での通行経路、周辺状況、利用者の特徴（補装具の使用・荷物等）、休憩の形態について観察調査をした。なお、休憩の形態については、利用中に何の行動も取らない行為を休息と定義した。また、その他の休憩の形態として、待ち合わせ・会話・飲食・読書・その他何らかの行動をとっているかについて観察した。調査は高齢者だけでなく、非高齢者にも実施している。調査できた利用者は大阪駅44サンプル、京都駅52サンプル、天王寺駅48サンプルであった。また、施設利用者は高齢者を中心に取り、結果は図-1に示すように、高齢者の利用者は調査した内の全体で40%程度であった。とくに、大阪駅では全サンプルの内7割近くは高齢者の利用者が多く見られたことが特徴として挙げられる。

3.高齢者のベンチ利用特性

ここでは、今回調査した結果をもとに、各駅における休憩施設の使用時間と休憩の形態について見ることとする。まず、高齢者・非高齢者それぞれの休憩施設の平均利用時間を示したものを図-2に示す。なお、利用時間帯の構成としては、午前中・昼間は高齢者の利用が多く、夕刻になると非高齢者の利用が多かった。この図より、休憩施設周辺の影響が考えられるが、3駅とも10分程度の利用が大半を占めている。駅別では京都駅での利用時間が長い。また、高齢者の休憩施設利用者は非高齢者のそれと比較すると、休憩の時間が長くなっている。つぎに、休憩施設の形態についてみたものが図-3である。この項目についても、駅によるが、高齢者の休憩行動のうち、4割から7割が何の行動も取らない、純粋な意味での休息活動をしている。つぎに、休憩行動のうち、休息目的の場合の平均利用時間を高齢者と非高齢者とを比較したものが図-4である。これより、休息目的の行動時間は図-2と比較すると短時間になっている。また、高齢者において

Hiroshi KITAGAWA, Hideaki OKAMOTO, Akihiro MOHOSHI

表-1 調査地点の概要

	大阪駅	天王寺駅	京都駅
調査地点の位置	北口噴水	公園口前	地下一階待合所
調査地点の特徴	屋内 歩行者主導線脇 改札口近く	屋外 歩行者主導線脇	屋内 歩行者主導線外 地下
周辺施設	噴水	喫煙所	待合所
施設の特徴	ベンチ	植え込みの縁	ベンチ

は、大阪駅での休憩時間は非高齢者のそれと比較すると短時間になっている。また、休憩利用時間については、ストリートファニチャーとしてのベンチに関する他者の従来研究⁹⁾と比較しても、休憩時間は約 10 分程度であり、休憩行動時間の違いはあまりないものと思われる。

つぎに、休憩施設の特徴による違いから考察する。ここでは、各駅における休憩施設の特徴の違いから、休憩行動の比較をする。表-1 に示すように、各駅の休憩施設は設置位置、とくに、歩行者導線上の位置や周辺状況等それぞれ違いがある。とくに、大阪駅ではモニュメント前ということもあり、待ち合わせ活動が多い場所である一方で、天王寺駅は待ち合わせのしにくい、歩行者導線の近くに休憩箇所がある。また、京都駅は地下の歩行者導線より離れた位置にある。とくに、天王寺駅においては、歩行者導線の近傍に位置していることによって、短時間で、休息行動の比率が高くなっている。高齢者の休息行動のしやすい位置は、歩行者導線の近くに設置する可能性を示唆していると思われる。

4.まとめ

本研究は、今後増加してゆく高齢者の外出活性を高めるため、駅施設のベンチと休息行動との関係を見た。今回は高齢者の休息活動特性を捉えることができた。結果として、高齢者の休息行動は 10 分以内であり、歩行者導線の近くにある場所ほど休息に行動が多く見られた。また、今回は施設としてベンチだけを見たが、他の駅施設における他の高齢者対策、例えば手すりの設置や移動支援が高齢者交通の活性化にどれくらいの影響を及ぼしているかを調べてゆきたい。

<参考文献>

岩上・中村・大蔵：ショッピングモールにおけるベンチ配置計画に関する基礎的研究，第 52 回土木学会全国大会講演概要集第 4 部 pp.110-111. 1997.

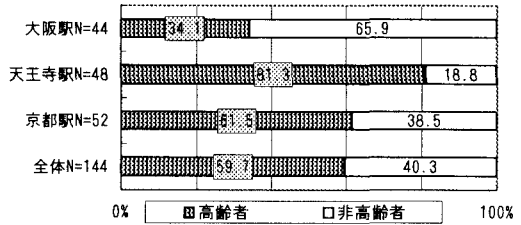


図-1 休憩施設利用者の構成

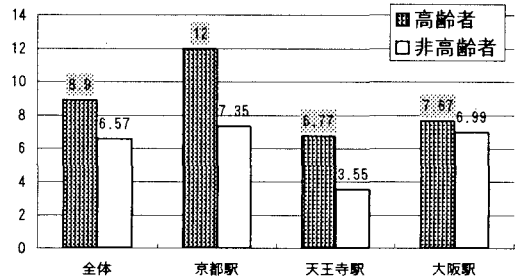


図-2 休憩施設利用時間

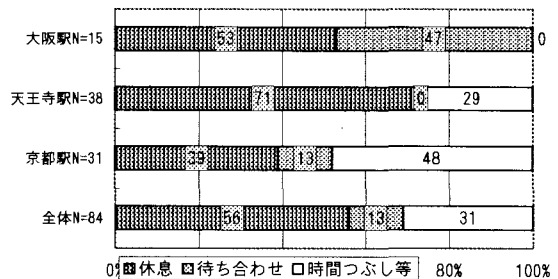


図-3 休憩の形態

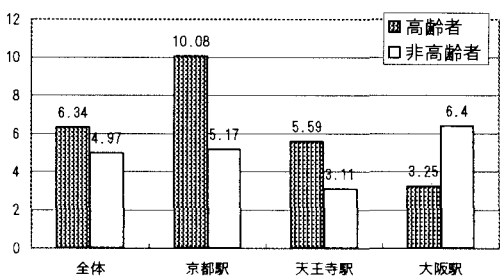


図-4 休息目的による休憩施設利用時間